

本テキストは、2017年の個展「internal works / 水面にしみる舟底」(ギャラリー揺)カタログ制作にあたり、Gallery PARC・正木裕介が執筆した原稿の抜刷りです。

文中では、本展3階展示作品《 thickness of time #02 》および「internal works」シリーズ作品について言及している部分があります。カタログは2階カウンターに設置してありますので、ぜひ手にとってご覧ください。

---

むらたちひろは染色の「染める／染まる」という物理的な現象や行為が持つ、精神的な側面の「染める／染まる」に向き合い、その重なりの中に作品を成している。

名前を付け、線を引くことで固着化しようとする自分(わたし)と世界(あなた)といった関係を、むらたは染色によって再び揺らし、滲ませ、浮かせる。近く・遠くに揺らぐ狭間(世界)を染色によって写しとることが、そこに目を凝らし、眺め、想うことを促すと信じて。

布という極めて薄い厚さを持つ物質に、染料(色)分子を染着させる「染」は、物質・状態・現象・行為のすべてを指す。ここでは、支持体とイメージと行為が分かち難く同一となり、地と図といった概念は消失する。また、イメージが現れるプロセスのすべてがサーフェイスとなることで、オモテとウラの関係すら曖昧となる。これにより「染」あるいは「色」という抽象名詞とも形容動詞とも呼べないものが、そのままイメージとなって布に現れる。これまでむらたは、こうした染色の特性を活かして「染める」に取り組んできた。物質と等しくなることでイメージの在り処を曖昧にし、図像は滲みによって具象・抽象といった絵画上の二元論の狭間に「イメージそのもの」を描き現す。むらたは『確かに在るけれどもふれることができない存在』を『イメージと物質の狭間(=染色)』に託すべく、染色しているともいえる。

むらたの個展『internal works / 水面にしみる舟底』は、郊外の民家を改装したことで、居住空間のしつらえを多く残したギャラリー空間に展開した。そして、かつて(今も)ここに住まう者の気配を感じさせるこの場での展示を構想するにあたり、むらたは近年に興味を向けていた「写真」を制作プロセスに取り入れた作品の制作に取り組んでいる。

展示作品である《 internal works 》シリーズの制作プロセスにおいて、まず「写真」はデジタルデータに置換され、インクジェットプリント

により布の上にインク(色の分子)として配される。次にプリント面の裏側の一部に水が与えられることで、染料によるイメージは溶解して裏側へと染み、そこに滲みや揺らぎがイメージとして現れる。写し取られた「何処かの森」、「何処かの街角」、「何かの姿」、「何時かの風景」は、染料と水の滲み、色の濃淡、布地の霏などが陶交ぜとなったものとして在る。それは「どのような図像であるかはわからないが、『何処かの何か』なのだろう」と思えるのだが、まさにこの点がむらたが本作で写真を用いている必然的な理由であると思われる。それは、写真が「いつか(の)どこか(の)なにか」しか「写せない」ものであるということが、見る者に経験的・身体的に認識されているという点である。

これまでむらたが布に色(染料)を置く刹那にあって、そこに描こうとする「イメージ」はむらたの内にあり、現れた像は「むらた(と染色)によるイメージ」として表出していた。そして、そのことで現れたイメージは「個人的・抽象的なもの」という、鑑賞者と隔絶した世界に押しやられてきた。しかし、本作では色を置くことの始点を「写真」としたことで、現れたイメージは「何か」でありながら、鑑賞者と地続きの世界に留まり続けている。だからこそ現れたイメージは揺らぐ世界の姿として認識され、その揺らぎや曖昧さに目を凝らすことを促す。「写真」はそのために仮設された「私(むらた)とあなた」の始点を同一にするためのもので、実際に使用された写真は、これまでにむらたが撮影したものから、特定の記憶や物語の無い「単なる光景」に限りなく近いものが選択されている。

確かにあった記憶や風景を写真という物質に、写真をデジタルデータという非物質に、データを染料による点の配列に、点の平面的な並びが見せる像を浸透によって布という物質に変容させるこのプロセスは、「染色」という物質・状態・現象・行為がそのまま「それ」を成している。そして、写真を始点に、そこに染色が介在することは、「それ」を「いつか(の)どこか(の)なにか」に「あり続け」させている。だからこそ「それ」を前に、鑑賞者は目を凝らし、距離をはかり、想いを巡らし、記憶を辿り、そこに何かの「イメージ」を見ようとする。つまり、染色による滲み・揺らぐ像は、鑑賞者をそのうつろいに取り込む波のようなものであり、イメージは鑑賞者と布との狭間に描かれる。

むらたの言う「確かに在るがふれることのできないもの」、「狭間に揺らぐ何か」は、こうして「水面」に例えることが的確なように思える。水面は「あちら」と「こちら」を隔てる境界に広がる面である。同時に水面

には、水中と水上の色と光の景が混じり合ったひとつの像がうつり、揺らぐ。確かに在りながらどこにもない「水面」という状態は、物質・現象が陶交ぜとなった「染色」の在りようにも重なる。

水面としての染色。それは、むらたが本展に先立つ2017年2月に京都市立芸術大学ギャラリー@KCUAにおいて発表した作品《 境界 borders / boundaries 》においても見て取れる。上下・左右といった対極から異なる色が滲み、せめぎ合いながらも境界線の消失した曖昧な状態が染色によって留められた布。無数の色分子の集合としての色面、異なる色面と色面がぶつかり混じり合う現象としての境界、「染めて／染まる」という行為、そして「旗のイメージ」、「あちら」と「こちら」に明確な「境界」を持ちながらも混じり合い、混じり合いながらもひとつになることはない曖昧な様相には、「個 集団」、「私 私たち」、「過去 未来」、「善悪」、「生 死」といった「世界」のあり様をイメージできるだろう。

むらたは《 境界 borders / boundaries 》において、染色という水面に対し、外側から眺めるマクロの視点を設定しているように見える。水面にうつる世界をミニマルな光と色へと還元したことで、そこには「あちら」と「こちら」の境界を眺める眼差しが生じる。そして、鑑賞者は自らの落とす影すら取り込みながら境界を眺め、いつしかその上に様々なイメージを重ねて描きだす。《 internal works 》においてその視点は水面である布の地平そのものに移動させられる。つまり、鑑賞者は外も内もない境界のただ中に位置させられることで、「あちら」と「こちら」を否応なく行き来する「眼差し」そのものとなる。

むらたは染色によって「境界」を描く。それは私と世界を含んで揺らぐ境界そのものであり、互いをうつし、染める／染まる水面そのものでもある。

その眼差しの先に発見するイメージは、むらたが見せるものか、私が見るものなのか。すべては曖昧だが、むらたはそこに目を凝らし、眺め、想うことを求めている。